

2014年3月8日

ワイルドライフマネジメントプレフォーラム in 東京

野生生物の「反乱」を食い止める

を開催しました

公益財団法人知床自然大学院大学設立財団は、2014年3月8日（土）、東京都港区の聖アンデレ教会で、ワイルドライフマネジメントプレフォーラム「野生生物の『反乱』を食い止める」を開催しました。

シカやイノシシ、サルなど、全国的に野生動物と人間社会との軋轢が問題となっている昨今の現状について、その道の専門家の方々に講師に招き、報告やトークセッションを行っていただきました。

当日は賛助会員の方々や一般参加者合わせて約90人の方にご参加いただきました。終了後には、同教会ホールで参加者と講師陣の懇親会を開き、知床産シカ焼き肉の試食も行いました。今後もワイルドライフマネジメント（野生生物保護管理）の必要性、それを担う人材育成の重要性を広く伝える活動に力を注いでいきたいと思えます。

プログラム（講師敬称略）

第1部 報告と問題提起

「シカが増えすぎている!？」

東京農工大教授 梶光一

「クマやイノシシが都会にやってくる!？」

兵庫県立大准教授 横山真弓

第2部 トークセッション

野生生物の反乱を食い止めるためには？

梶光一（前出）、横山真弓（前出）、

横山隆一（日本自然保護協会常勤理事）

渡辺綱男（国連大学シニアプログラムコーディネーター、元環境省自然環境局長）

中川元（当財団業務執行理事、元知床博物館長）

司会：鈴木幸夫（当財団理事）





梶 光一さん

北海道環境科学研究センターを経て東京農工大学教授。日本哺乳類学会理事長。我が国のシカ研究の第一人者。



横山 真弓さん

兵庫県立大学准教授。ツキノワグマやニホンジカ、イノシシなど、人と軋轢のある野生生物の行動研究を行っている。

■ シカが増えすぎている!?

江戸時代のシカの分布状況と、1978年と2003年の環境省のニホンジカ分布調査があります。シカは江戸時代以前の生息地に分布を拡大しており、環境省調査でも、25年間で分布域は1.7倍に拡大しています。シカが全国的にかつての空白地域に広がっていますが、植生に非常に強い影響を与えています。ひどいところでは林床、林の下の草も全部シカに食い尽くされて、土が流れてしまっている。こうなると、土壌浸食が起こってきて、もう元に戻らない。農林業被害も深刻ですが、国土保全とか生物多様性の問題まで拡大してきていると思います。

狩猟者の数は70年代には50万人いましたが、現在20万人を下回っています。一方シカの捕獲数は2010年時点で20万を超え、現時点では30万頭を超えています。狩猟者は急激に減り、シカは急激に増えている。減るばかりでなく、高齢化が進んでいます。狩猟者は60歳以上が60%を占めています。私たちはこれまでに全く経験していない時代を迎えています。

知床岬のシカは70年代までに一回絶滅し、その後急激に増加します。私は86年から調査を始めましたが、小さい木の樹皮食いから始まり、その後枯れ木が増え、みるみる植生が変わっていく様子を観察しました。それらを踏まえ、知床では世界自然遺産になったときにシカに関する管理計画を作りました。世界遺産ですから、基本方針は、できるだけ人為的な介入を避けることです。でも希少植物などを放置したら絶滅する恐れがある場合、捕獲を含めた対策を行いましょうということです。

私たちの目標は、数を減らすことにあるのではなく、どんな状態に持っていかということ。シカが増えれば、植物の豊かさ、花の開花率、最後は群落に影響を与える。これを減らしていったときに何が起るかというモデルは、世界でも全くない。それを今開発していこうというのが、私たちのミッションです。

■ クマやイノシシが都会にやってくる!?

まず、人家近くまでやってきている野生動物のビデオからご紹介します。神戸の市街地では20年以上前からイノシシが出没しています。新神戸駅近くのマンション前でイノシシがごみを漁ったり、コンビニの袋を持っている人を襲うと、買ったものがストンと落ちるという学習をしてしまったのです。郡部の方ではツキノワグマ。人家の庭にある柿の木に親子グマがいます。自分の場所だと言わんばかりに。私たちがカメラを向け、大きな声を出しても何ともない。これは本当に野生動物の姿でしょうか。

神戸では餌付け問題があります。通報件数の多い場所を集計すると餌付け地域から150m以内の範囲で被害が発生しています。近くの六甲山は豊かな森で、イノシシが暮らすのに何の問題もないのです。ところが里に出てくるのは山に餌がないからだと都会の人は思い込んでいます。つまりは食べ物のあるところに出没します。クマも実は同じ。人は気にとめていなくても、実はクマを誘引していたという事例があります。

秋にクマが出没した場所で、捕まえたクマにGPSを装着して調べると、柿の実に繰り返し来ていることがわかりました。その集落では、柿の実を数えてみると248本ありました。ざっと計算すると集落に大体6トンくらいの実があることとなります。こんな豊かな餌資源を、クマが見逃すはずはありません。「柿の木切ってください」と言っても田舎は高齢化が著しく労力がなく、簡単ではありません。

動物はどんどん増え、どんどん学習しています。それにどう対応するかは、我々がいかに対応する能力をつけていくかだと思います。対策者を増やしていかなければなりません。何が起っているかを調べて対策を立案し、それを実施して検証して見直しをしていく。このサイクルを行うのが非常に重要です。

トークセッション



左から 梶 光一
横山 真弓
渡辺 綱男
(国連大学シニアプログラムコーディネーター、
元環境省自然環境局長)
横山 隆一
(日本自然保護協会常勤理事)
中川 元
(当財団業務執行理事、元知床博物館長)
司会：鈴木 幸夫 (当財団理事)

■ ヒグマと人を追い払う知床

司会 先ほどから軋轢と対策の状況についてお聞きしてきました。他にもいろいろ軋轢を起こしている野生動物がありますので、補足の説明をまずお願いします。

横山(真) シカ、クマ、イノシシ、それにニホンザル。これが鳥獣保護法と呼ばれる法律の中で、都道府県が特定計画というのを策定している、主に問題となっている種だと思います。外来生物としては、ほ乳類はアライグマ、ヌートリアなどがあります。

司会 中川さんから知床、斜里町での野生動物との共存の方策、現場についてお話をお願いします。

中川 知床は原生の自然、豊富な野生動物、素晴らしい生態系があるのはよく報道されて、皆さんも耳にされていると思いますが、そこでいろいろな問題が起きていることは、全国的には報道されていないかと思います。幸いシカについてはさまざま方策が講じられ、植生が回復の方向に向かってきていますが、他にも課題があります。

知床はヒグマの生息地です。そして年間 200 万人近い観光客が来ます。しかもヒグマが人を恐れなくなってきたて久しいです。10 数年前から、人を恐れず、頓着しないヒグマが現れています。知床は大規模な鳥獣保護区になって 30 年以上。そんな中でヒグマも捕獲されないという経験を積んできたということもありますが、一般の観光客もクマを恐れなくなってきた。

ヒグマが普通に道路ぶちにいたり、秋に川でサケマスを獲得姿が車道脇で見られたりします。そうすると人が次々と集まり、車から降りて写真を撮る、近づく。大変危険な行為です。^{*}知床財団の職員はヒグマが出没するとまず追い払いをしますが、一方で人も追い払わなければならない。なかなか言うことを聞いてくれない人もいます。

^{*}知床財団～1988年に斜里町が出資して設立した公益財団法人。現在は羅臼町も設立者となり、環境教育や野生動物の保護管理・調査研究、森づくりなどの活動を行っている。

それからとんでもないことですが、ヒグマに餌を投げ与える行為も確認されています。

司会 「日本の野生動物保護の法制度の概要」という資料を配布しました。渡辺さんの方から少しご説明いただければと思います。

渡辺 今、鳥獣保護法の改正作業が進んでいます。特定計画で目標を設定し、個体数を減らすことも進められていますが、それを狩猟や被害対策の有害駆除だけに委ねるのではなく、国や都道府県が自ら生態系のことも意識し、個体数をバランスのとれた状態にしていくための事業を、計画をたてて進めていく。それを法律的にも位置づけようというもの。兵庫や北海道の先駆的な取り組みを、全国に広めていくことを、制度的にも後押しすることをめざした改正が検討されています。

■ 対策は地域ごとのオーダーメイド

司会 制度的な改革、改正の観点以外から、軋轢をどう止めていくか。横山隆一さんから聞かせてもらえれば。

横山(隆) 軋轢を解決する手順や技術は、全世界共通なのかもしれませんが、一体何をするかという具体的な内容は、地域ごとに全部オーダーメイドなのですね。ですから、手順や技術の教科書はたくさん作られていると思いますが、手順とその地域での解決方法という内容の両方を普遍的な情報として書き込んだ教科書は多分作れないのだと思います。どうやって地域ごとの内容をきちんとオーダーメイドで作っていくか。それがとても大事だなと思います。

現代の私たちは、身近な自然環境を全く利用しなくても生活できてしまうという社会に生きています。それをそのままにした中で、この軋轢を解決できるのかどうかということが、非常に心配です。周囲の自然を全く資源

として使わない初の日本人、初の経験をしているこの時代に、地域の自然をどうしていくか。それがこの軋轢や問題をどう解決していく大きなキーワードではないかと思ひます。

司会 地域資源の利用という言葉が出てきましたので、その辺りを梶さんから。

梶 資源を利用しないという話がありましたが、わかりやすくいうと、野生動物を食べるといふことがあると思ひます。日本は宗教的に食べなかったという方もいますが、たくさんの種類の動物を伝統的にずっと食べてきたが、食べる文化を忘れてしまった。ですから都会に住む皆さんが一番できるのはおいしく食べるということ、すごく重要なことです。

野生動物管理は動物と被害の問題ではなくて、中山間地域、山村など、その地域の持続性の問題だと思ひます。今大きな問題は、狩猟者だけでなく、地域資源管理者、これは森林を管理する人、それから林業、農業も、そういう方々が急速になくなっていることです。地域資源の管理者は、要するに地域の持続性を考えて、そういうことをマネージできる人、そういう専門家が必要。やはり地域資源を持続的に管理していく仕組みづくりが一番重要かなと思ひています。

司会 今回議題のワイルドライフマネジメントとは何か。

■ 重要なのは人材育成、教育

それを今後どういふふう展開していくかということ、一言ずつお願ひします。

横山(隆) やらなければならないのは地域の環境管理であり、地域の社会状況マネジメントだと思ひます。

高等教育を受けた人に、地方や地域に目を向けてもらうにはどうしたらよいか。大学で学び、こういう環境について研究する能力を持つ人たちが、地域で住むためにはどうしたらよいか。それは大変肝心な話で、人生設計をつくれる生業があればいいのです。大学もそこまで仕事をするべきと思ひます。ところが今はガイドをしないかとか、一次産業どうだとか、今ある生業を半端に突きつけているように感じる。地域の環境を維持する中核になれる人たちに人生設計できる新たな生業を一緒に作っていくのが、今40、50歳の人たちの責務ではないかと。40、50代の人たちが、まだ世の中に認めてもらって

ない仕事を職業に仕立て上げていくには、それよりも高齢の方々が、その生活や仕事を今、現実に支えなければならない。そうやって回していけない限り、軋轢も解決できないのではないかと思ひています。

渡辺 知床ではさまざまな機関が縦割りの壁を超えて、協働の関係が生まれました。大きく見て環境行政と農林行政、あるいは森林行政、そういったところがちゃんと連携していけるか。また国、都道府県、市町村。それぞれが動いて、連携関係をどうつくっていくか。

そして行政だけではなく、狩猟者、農業者、あるいは地域住民など、いろいろな立場の人たちが、どう一緒になって動けるか。きっとそれをつなぐ大事な役割として、専門家が果たしていく役割は大きいものがあると思ひます。そのための人材をどう増やしていくかというのが重要な課題だと思ひます。

横山(真) 私、兵庫県に行って丸13年になるのですが、最初全く野生動物の科学的情報がありませんでした。一から情報を集めなければという状況でした。

まず必要なのは科学的な情報収集と分析、それと発信ですね。その情報を国民と共有をして、じゃあどうするべきかという議論をしていく。細かいところは地域によって全然違ってくると思ひます。同じデータを見ても違いかも知れません。日本の今の野生動物の現場では、あまりにも情報収集の仕組みがなさすぎる。そういう意味で知床は莫大なデータがあると思ひますので、スタートラインとしてはすごく高い位置にあるのかなと思ひます。これをどう分析をして、みんなで共有できる形にしていくのか。それらが重要だと思ひます。

梶 重要なのは法的な整備、そのために現場の問題をどう解決するかということ、下からあげていくことですね。私たちが現場に行ってやればいいのですが、圧倒的に時間が足りなくて、これでもかといふ問題が出てくる。次に大変なのが市町村です。市町村の担当者に強力なサポートが必要です。専門性やコーディネート力があり、都道府県の計画と市町村の計画をつなぐ人たちも必要です。単に野生動物を何頭獲ったかということではなく、地域の持続性のためにどういふ力を発揮できるのか。やっぱり一番重要なのは、教育でしょう。教育が世界を変える。今私たちが直面していることと同じことがアジアで起こってきて、その後にはヨーロッパでも起こってくるのです。日本の状況を今世界が注目しています。